高松大学紀要，39．153～170

保育者養成カリキュラムの構造化に関する取り組み

松　原　勝　敏
西　浦　和　樹
坪　井　貴　子

Structurizing of Curriculum for the students of teacher-training course of early childhood care and education in junior college

Katsutoshi Matsubara
Kazuki Nishiura
Takako Tsuboi

Recently，improving a Curriculum of university has benn one of the matters of serious concern．We intend to structurize the curriculum of teacher training course of our junior college，and to build up an efficient curriculum to help the students to acquire the knowleges and skills for early childhood care and education．And，on the other hand，we hope that all teachers（professeors，assistant professors etc．）understand the object and characteristics of our curriculum，and that they do the best for doing their duties．

key words：curriculum，teacher-training course，early childhood care and education．

はじめに

本事業は，本学幼児教育学科の履修期間である２年間に開設される全ての学科目について，それぞれの関連性，順次性等を考慮に入れたカリキュラムの構造化を行うものである。そして，それに基づく履修指導及び授業展開によって学生の効果的な履修を実現するとともに，教員のさらなる授業改善を展開することを目的とする。

本事業の着想に至った背景として，大学における個々の教員の独立性の高さがある。個々の教員の独立性が高いことによって，教員相互の連携や協力関係が乏しいことは頻繁に指摘されるとおりである。一方，幼稚園教諭免許状と保育士資格の同時取得には必要単位数が多く，教員相互の連携や協力関係の欠如によって，近接する領域の授業科目間で授業

内容の重複や欠落が生じた場合に，カリキュラム全体に及ぼす損失があまりに大きい。

そこで，全教員の授業内容の点検を行うとともに，保育者養成という共通の目標に照らして授業内容を精選・調整し，カリキュラムを構造化する。そして，その結果を授業内容に反映させるとともに，２年間の保育者養成カリキュラムの履修系統図や履修指導のための冊子資料を作成して学生に配布する。また，本学のホームページにも掲載して履修指導に有効利用し，学生の学習上の便宜を図るとともに，教員の授業改善を行いたいと意図するに至ったのである。

カリキュラム全体における各科目の位置づけの明確化によって，学生自らの関心・意欲に基づいた履修科目の選択行動や主体的な学習を実現したい。また，授業内容の精選により学習上の負担が軽減され，学生一人ひとりに学習内容のよりいっそうの定着・深化を実現したい。他方，教員には，教授組織の一員としての意識が高まり，教員相互の連携・協力関係を構築することによって，授業内容の無駄な重複や欠落が防止されることを期待する。こうして，学生の学習意欲に応えることが可能となり，より密度の高い授業実践が可能となるであろう。こうして，本学幼児教育学科の教育力を高め，本学幼児教育学科の教育責任を果たすことによって，地域社会によりいっそうの貢献をすることを目指すのである。

本事業は，平成12年度に私学共済事業団に対し，「教育・学習方法等改善支援経費」の申請を機に開始された。しかしながら，認可が下りるまでにかなりの時間を要したこともあって，実際にはスタートが遅れてしまった。また，大学のいわゆる体質の問題もあってなかなか実現が難しい問題を抱えながら進めている。

本稿は，こうした取り組みの中間報告として，本学紀要の一部を借りて公開するとともに，各方面からの忌憚のないご意見・ご指導を賜ることを願うものである。

１．平成12年度における取り組み

平成12年度においては，先に記したとおり，採択の結果が判明するまでに時間がかかったこともあって，強力に推進することが難しい状況にあった。しかし，本学幼児教育学科は，平成10年度に，従来の児童教育学科を改組転換する形で誕生した。その時に，当時の文部省に対して提出した申請書には，次のように記されてあった。

6．教育方法及び履修指導方法

(1) カリキュラム構造図・系統図の作成と配布

学生は，科目の選択履修にあたって，カリキュラムの全体像を理解した上で，自らに必要な科目を選択履修することが可能となり，より積極的に授業に望むことができる。また，教員は，カリキュラム構造図・系統図の作成にあたって綿密なるカリキュラム検討委員会での討議を通して，講義・演習・実習・研究室活動の有機的な関連を図ることができると同時に，教員個々人が自ら担当する科目の位置づけを明確に理解して授業を行うことが可能になる。そして，限られた修学期間の中で，無駄な重複や欠落を避けながら，保育者として必要な素養を学生一人ひとりが効果的に身につけるための質の高い指導を全教員の協力の下に実現できるのである。

さらに，積極的に授業評価を行うことによって，学生の学習ニーズを的確に把握し，教員相互に連絡調整を密に行うことによって反省を積み重ね，一段と質の高いカリキュラムの実現に向けての体制を構築する。

残念なことではあるが，この文章にある内容は，幼児教育学科に所属する全教員の合意によるものではなかった。それは，平成10年度の改組転換が，改組転換を目指したプロジェクト・チームによってなされたという事情によるのであって，改組転換等の特別な場合には，どの大学でも経験することであろう。そこで，この内容を全教員の共通認識へと高めるために，新カリキュラムの勉強会や学生指導のあり方などについて学科内でことあるごとに話題にしながら合意形成の努力をした。

(1) 冊子「これから仲間となるみなさんへ」の作成・配布

具体的な形としては，本学幼児教育学科の入学試験に合格し，入学が予定されている高校生に対して，学習への意欲形成を図るための小冊子「これから仲間となるみなさんへ」を作成した。

この小冊子は，本学が従来に行っていた入学前ガイダンス（毎年２月上旬に実施）に代わるものである。この冊子を作成したのは，この入学前ガイダンスが廃止になったことがきっかけとなった。その理由は，短期大学の場合，推薦入試によってほとん

どの入学者が決定してしまうことにある。つまり，11月の時点で進路が決定してしまった生徒たちのなかには，進路が決まったことで安心し，高校におけるその後の学習に意欲を失ってしまったり，２月から３月の卒業式までの期間及び卒業式後から本学幼児教育学科への入学までの長期に渡って学習の機会を逸してしまうことがあるからである。この期間に，入学予定者に対してなんらかの指導ができればよいのであるが，学籍は高校にあるために，必然的に指導は限定的になってしまう。そこでこの小冊子を作成することになったのであるが，この小冊子に，本学幼児教育学科のカリキュラムを構成する基本原則や特色，そして，カリキュラムの構造図と系統図を掲載して，入学予定のすべての高校生に配布した。

この冊子には，そのほかに，大学生活の様子についてのカラー写真や在学生からのメッセージ及び教員からのメッセージを掲載しており，入学予定者の大学生活への期待と意欲の形成を図ることにつながったものと考える。

(2) 冊子「カリキュラムの考え方と特色」の作成・配布

次に具体的に行ったことは，本学幼児教育学科のカリキュラムの解説冊子「カリキュラムの考え方と特色」の作成である。本冊子の主たる内容は，「幼児教育学科の目指す保育者像」「教育課程編成の考え方及び特色」「社会からのニーズに応える今日的専門科目」「カリキュラム概念図」「カリキュラム系統概念図」となっている。この冊子は，３つの方向を向いて作成されたものである。まず第一の方向は，本学幼児教育学科の新入生に対するものである。

小学校から中学校，中学校から高等学校への進学に際しては，上位の学校で学習する教科・科目には，専門課程の科目を除いて，下位の学校で履修した教科・科目名と同じ，あるいは関連性を容易に見て取ることのできる教科・科目名の授業がたくさんある。しかしながら，大学の教育課程になると，それまでの学習経験でなじみとなった教科・科目名はそのほとんどが消えて，新たな科目がたくさん時間割に割り当てられる。その点は，もちろん，学習意欲を満たすものとして大きな魅力を有することも事実であるが，いきなり「難しいそう」「理解できるだろうか」との不安をかき立ててしまうことも事実である。また，短期大学における保育者養成カリキュラムにおいては，免許・資格を取得するために必須となる科目がたくさんあるので，履修は個々の学生による選択履修が建前でありながら，実質的には指定された時間割に従って，

選択の余地はほとんどなく履修することが求められるというのが実態である。そして，授業が開始されるといきなり専門的な内容が学生に押し寄せてくる。そうなってくると，主体的な選択行動に基づく意欲的な学習の継続が難しくなってくることは容易に想像できる。

また，実技や実習など，保育現場において活用することが具体的に連想できる内容の授業科目について学生の多くが意欲を示すが，保育の目的や内容を定めるために基礎となる理論的な科目にはその有用性が理解できないまま時間が経過してしまうこともある。そうなってくると，理論的な科目は，「役に立たない難しい科目」で終わってしまう危険性もはらんでいる。

そこで，カリキュラムを構成する１つ１つの科目が，保育者になるにあたってどのような意味をもっているのか，なぜこの科目を学ばなければならないのか，この科目で学習した内容がどのようにして後の学習や保育者としての力量につながっていくのかを学生一人ひとりに理解させて意欲的な学習態度を形成することを意図したのである。

２つ目の方向は，本学幼児教育学科の専任教員および他学科に属しつつ本学幼児教育学科の授業を担当する教員，そして非常勤講師たちに向かうものである。

「学問の自由は教育の自由と一体」との認識は，ある意味，諸刃の剣の状況を呈している。もちろん誠意をもって，学生のために，保育者養成課程において求められる教育内容をしっかりと考えた上で，自らの責務を果たすべく努力している教員はたくさん存在する。しかしその一方で，大学の授業批判に関する書物や雑誌記事を見れば必ず登場するタイプの教員も存在することは否定できないのである。

そこで，カリキュラムの解説冊子を配布することによって，自己改善の努力を求めるとともに，本学幼児教育学科が目指す保育者養成の目的を達成するために，個々の教員が行わなければならないことをしっかりと自覚してもらいつつ，協力を求めることを意図したのである。

３つ目の方向は，本学から外へ向けてのものである。これは，たとえば，高等学校や保育所その他へ，入試説明会や実習の打ち合わせの時に配布されることによって，本学が目指す保育者養成を理解していただくと同時に，本学が地域社会のニーズに対して，その教育責任を果たす意志の現れとなることを意図したものである。

２．平成13年度の取り組み

平成13年５月23日付け「官報」第3120号に，厚生労働省告示第198号が掲載された。この告示によって，平成14年４月１日からの指定保育士養成施設の授業教科目及び単位数並びに履修方法が定められた。これは，多様なサービスに対応することのできる資質の高い保育士の養成を目指すもので，その方向性として６つの柱を立てていた。そのうちの４つは，次のように記されていた。

> (2) 多様な資質をもった保育士養成に向けて，各保育士養成校がそれぞれに創意工夫ができるように教科目の大綱化を図ることが必要である。
> (3) 実践力や応用力をもった保育士を養成するため，施設現場における実習の強化を図ることが必要である。
> (4) 保育士養成校の卒業生の多くが保育士資格と同時に幼稚園教諭免許状を取得している現状を踏まえ，この同時取得をより容易にする観点から，幼稚園教諭養成課程との整合性を確保することが必要である。
> (5) 総履修単位数については，学生にとって過度の負担とならないよう現行どおり68単位とすることが妥当である。

また，新しい保育士養成課程の科目及び単位数は，次頁表１に示す通りである。

この結果，本学幼児教育学科でも，新カリキュラムの構築に向けた議論が現実味を帯びてなされるようになってきた。その過程で，本学幼児教育学科が特に気をつけたことは，学習内容の消化不良対策，いびつな時間割の改善，研究室担当教員による指導強化の３点である。

(1) 学習内容の消化不良対策

まず，第一のポイントである，学生の消化不良対策は，幼稚園教諭免許状取得のための科目と保育士資格取得のための科目の共通化を図ったことである。これは，幼稚園教諭免許状取得のための科目及び単位数と保育士資格取得のための科目及び単位数が，所轄官庁によって個々に定められているために２重のカリキュラムとなり，結果として２年間の修学期間に多くの単位数を強いてしまう状態に陥っていたことの反省

表１　新保育士養成カリキュラム

必修科目

系　列	科　　目	単位数	本学開設科目	単位数
保育の本質・目的の理解に関する科目	社会福祉（講義）	2	社会福祉（講義）	2
	社会福祉援助技術（演習）	2	社会福祉援助技術（演習）	2
	児童福祉（講義）	2	児童福祉（講義）	2
	保育原理（講義）	4	保育原理ＩＡ（講義）	2
			保育原理ＩＢ（講義）	2
	養護原理（講義）	2	養護原理（講義）	2
	教育原理（講義）	2	教育学原論（講義）	2
保育の対象の理解に関する科目	発達心理学（講義）	2	発達心理学Ｉ（講義）	2
	教育心理学（講義）	2	教育心理学（講義）	2
	小児保健（講義・実習）	5	小児保健（講義）	4
			小児保健実習（実習）	1
	小児栄養（演習）	2	小児栄養（演習）	2
	精神保健（講義）	2	精神保健（講義）	2
	家族援助論（講義）	2	家族援助論（講義）	2
保育の内容・方法の理解に関する科目	保育内容（演習）	6	保育内容－表現Ｉ（演習）	1
			保育内容－表現Ⅱ（演習）	1
			保育内容－健康（演習）	1
			保育内容－人間関係Ｉ（演習）	1
			保育内容－環境（演習）	1
			保育内容－言葉（演習）	1
	乳児保育（演習）	2	乳児保育（演習）	2
	障害児保育（演習）	1	障害児保育（演習）	1
	養護内容（演習）	1	養護内容（演習）	1
基礎技能	基礎技能（演習）	4	音楽Ｉ（演習）	2
			図画工作Ｉ（演習）	2
			体育Ｉ（演習）	2
保育実習	保育実習（実習）	5	保育実習事前事後指導（実習）	1
			保育実習Ｉ（実習）	4
総合演習	総合演習（演習）	2	総合演習（演習）	2
小　　計		50		52

選択必修科目

系　列	科　目	単位数	本学開設科目	単位数
保育の本質・目的の理解に関する科目		17以上	保育原理Ⅱ（講義）	2
			保育環境論（講義）	2
保育の対象の理解に関する科目			発達心理学Ⅱ（演習）	2
			臨床心理学（演習）	2
			子ども研究（演習）	1
保育の内容・方法の理解に関する科目			保育課程総論（講義）	2
			保育内容－表現Ⅲ（演習）	1
			保育内容－人間関係Ⅱ（演習）	1
			野外活動実習（実習）	1
基礎技能			音楽Ⅱ（演習）	2
			図画工作Ⅱ（演習）	2
			体育Ⅱ（演習）	2
			子ども文化（演習）	2
			国語（講義）	2
保育実習	保育実習Ⅱ（実習）	2	保育実習Ⅱ（実習）	2
	保育実習Ⅲ（実習）	2	保育実習Ⅲ（実習）	2
		＊２以上		
小　　計		19以上	保育実習２単位を含めて10単位以上取得	28

によるものである。事実，平成10年度の改組転換においては，学生が幼稚園教諭免許状と保育士資格の両方を取得して卒業するためには，２年間で89単位が必要であった。そして，実際には，95単位前後の単位を取得して卒業する学生が多かった。

平成14年度の新しい保育士養成カリキュラムにおいては，従来の「告示科目」「通知科目」の枠がなくなり，従来の通知科目は，先に示したとおり「選択必修科目」として科目設定が大綱化された。

そこで，本学幼児教育学科では，従来から開設され，幼稚園教諭免許状取得に関してのみ単位としてカウントされていた科目と本学に特色ある特別教育プログラムとして幾年にわたり実施しながらも単位として認定されていなかったものを単位化することにした。

その１つが「保育課程総論」である。保育内容に関する科目は，「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の科目が保育士資格取得のための科目として設定されていた。これら５領域は，科目としては５種類設定されるけれども，子どもの遊びを通した保育においては，個々の領域が単独で指導されるべきものではなく，あくまでも５領域が総合的に指導される性格を有している。具体的には，子どもに遊びを通して生きる力の基礎となる心情・意欲・態度などを身につけてもらうために意図的・計画的に遊びが展開するように環境を整える力を学生一人ひとりが習得することを目指し，総合的な見地から，保育課程をとらえた学生への指導の実現を意図して，保育士資格取得のための選択必修科目に組み入れた。

２つ目は「子ども研究」である。子ども研究は，少子化が深刻化している今日に，まさに少子化の時代に成長した学生たちが，直接子どもに触れたり，子どもの遊ぶ姿を見る機会が減少した結果，保育者を目指す学生が子どもを知らないと言う現状に対応するものである。この授業では，子どもについての講義や観察，参加，研究，発表，討議などを経て，子どもを見る目や子どもの成長・発達や心の動きなどを積極的に学ぼうとする姿勢・態度を涵養し，自ら主体的に保育に取り組めるよう実践的指導力につながる資質能力を育成することをねらっている。

そして，３つ目は，１年次の夏に行っている夏期セミナーの単位化である。今日，都市化，地域の教育力の低下，自然の減少により，子どもたちの生活体験や自然体験が失われつつあると危惧される。しかし，このことは，何も子どもたちに限ったものではなく，これから保育者になろうとする養成課程の学生についても同様である。

そこで，従来から学生に義務づけていた夏期セミナーとして自然体験学習を，今後は益々内容の充実を図りながら，子どもたちに豊かな生活体験や自然体験を指導することのできる保育者を養成するとともに，環境問題についてもより一層の認識を深めることができるように指導を徹底することを目指して保育士資格取得のための科目に組み入れた。

単位数にすればわずか４単位ではあっても，学生への負担軽減の効果は十分にあるものと考えられる。

(2) いびつな時間割の改善

いびつな時間割の改善については，まず表２，表３をご参照いただきたい。これは，平成11年度に在学していた学生の時間割の一例である。１年生前期から２年生前期にかけての時間割の密度が一目瞭然である。それに対して，２年生の後期は大幅に空き時間が増える。この学生は，比較的に意欲のある学生で，選択科目を自分の学習関心に従って履修していた。しかし，学習意欲がやや劣り，空き時間の確保を重視して履修科目を選択した学生の場合，２年生後期には月曜日と水曜日に授業を選択履修せず，事実上週休４日という状態にあった。もちろん，その場合には，他の曜日の１日あたりの履修科目が増えるけれども，このような状態は決して正常な履修が確保されているとは言い難いような状況にあった。

そこでまず第一の対処としては，１年次に開講されていた教養科目を語学等２年間継続するものは別として２年次に開講することにした。従来から一般的に，教養科目を履修した後に専門科目の履修が多くの大学でなされていたことは事実である。しかしながら，短期大学では１年次の最初から多くの専門科目の履修が求められること，教養は生涯にわたって身につけるべきものであることを考えた場合，１年次に卒業に必要なすべての教養科目の単位取得を学生に求める意味はなくなってしまうのである。

また，先に述べたことと重複するけれども，保育士養成カリキュラムの大綱化によって独自に開設科目を設定する可能性が出てきたことを利用して，従来は教員免許状取得のためだけに認められていた科目をその教授内容を考慮して保育士資格取得のための科目とし，本学幼児教育学科における開設科目において，教員免許状と保育士資格取得のための科目の共通化を図って，時間割にゆとりをもたせて，過密な授業時間割によって引き起こされる学習内容の消化不良をなくし，より効果的な学習指導を

意図したのである（表４）。

表２　平成11年　学生の時間割表サンプル

１年生前期（学生Ｏ）

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1		教育工学		保育原理Ⅰ	音楽Ⅰ
2	教育心理学	教育学原論	図画工作Ⅰ	哲学Ⅰ(哲学)	保育課程総論
3	科学Ⅰ (生活)	レクリエーション概論		保育内容－表現Ⅰ	体育Ⅰ
4	生活Ⅱ (保健体育)	保育学研究法	児童福祉	卒業研究	社会福祉Ⅰ
5			英語Ⅰ	小児保健	研究室活動
備考	授業時数　20／25（研究室活動を含む） 取得単位数　28（通年科目は半年分を加算，卒研等を含まない）				

１年生後期（学生Ｏ）

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1	レクリエーション実技	教育実習 事前事後指導	生活Ⅶ (日本国憲法)	保育原理Ⅰ	音楽Ⅰ
2	発達心理学Ⅰ	教育実習 事前事後指導	図画工作Ⅰ	社会Ⅲ (現代社会)	保育方法論
3	乳児保育	子ども研究	養護原理Ⅰ	保育内容－表現Ⅰ	体育Ⅰ
4	生活Ⅱ (保健体育)	子ども研究	同和教育	卒業研究	社会福祉Ⅱ
5		保育実習 事前事後指導	英語Ⅰ	小児保健	研究室活動
備考	集中講義 保育実習Ⅰ（４単位）レクリエーション実技（１単位），社会福祉Ⅱ（２単位のうちの１単位） 授業時数　24／25（研究室活動を含む） 取得単位数　35＋２／３単位（集中講義を含む。他，計算方法は上に同じ）				

表３　平成11年　学生の時間割表サンプル

２年生前期（学生Ｋ）

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1	保育内容－ 健康	教育実習 事前事後指導	音楽Ⅱ	発達心理学Ⅱ	教育制度論
2	小児栄養	教育実習 事前事後指導	保育内容－ 環境	国語	
3	体育Ⅱ	▲保育実習 事前事後指導	図画工作Ⅱ	保育内容－ 人間関係Ⅰ	精神保健
4		保育内容－ 表現Ⅱ	小児保健実習		卒業研究
5			小児保健実習		研究室活動
備考	集中講義 教育実習（２単位），保育実習Ⅱ（２単位，事前事後指導を含む） レクリエーション指導実習（１／２単位） ▲－不定期に開講 授業時数　19／25（▲及び研究室活動を含む） 取得単位数　21＋５／６（集中講義を含む。他，計算方法は前に同じ）				

２年生後期（学生Ｋ）

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1			音楽Ⅱ		
2		小児栄養実習	障害児保育		
3	体育Ⅱ	小児栄養実習	養護原理Ⅱ	保育内容－ 人間関係Ⅱ	保育内容－ 言葉
4	児童文化				卒業研究
5					研究室活動
備考	集中講義　教育実習事前事後指導(２／３単位)，教育実習（２単位） レクリエーション指導実習（１／２単位） 授業時数　11／25（研究室活動を含む） 取得単位数　15＋５／６（「卒業研究」３単位含む。他，計算方法は前に同じ）				

表４　平成14年度入学生の時間割表サンプル

１年生前期（学生Ｏ）

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1			英語Ⅰ	教育学原論	音楽Ⅰ
2	体育Ⅰ		図画工作Ⅰ	乳児保育	保育内容－表現Ⅰ
3	保育原理ⅠＡ		教育心理学	小児保健	保育課程総論
4		保育学研究法	情報機器演習Ⅰ	総合演習	社会福祉
5					研究室活動
備考	授業時数　16／25（研究室活動を含む） 取得単位数　21（通年科目は半年分を加算）				

１年生後期（学生Ｏ）

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1		教育実習 事前事後指導	英語Ⅱ	小児保健	音楽Ⅰ
2	体育Ⅰ	教育実習 事前事後指導	図画工作Ⅰ	乳児保育	保育内容－表現Ⅱ
3	保育原理ⅠＢ	子ども研究	発達心理学Ⅰ	児童福祉	養護原理
4		保育実習 事前事後指導	情報機器演習Ⅱ	総合演習	研究室活動
5					
備考	集中講義 保育実習Ⅰ（４単位） 授業時数　18／25（研究室活動を含む） 取得単位数　20単位（集中講義を含む。他，計算方法は上に同じ）				

(3) 研究室担当教員による指導の強化

最後に，研究室担当教員による指導の強化について述べておきたい。本学においては，その建学の精神において「対話にみちみちた豊かな人間教育をめざす大学」を掲げている。この精神に則って，本学の教育の大きな特色である研究室制度を中心に，学生と教員の緊密な関係を構築しながら，学生の指導に専心している。このような教育体制を維持し，かつ，強化していくためには，全教員の一致団結が必要であること

は言うまでもない。この意識は本学幼児教育学科の教員に共通するものであり，すべての教員が学生の入学時から卒業時まで，細心の指導にあたるべきという認識が形成されていた。そこで，研究室担当の教員が，学生全員を対象とする授業科目を１年生前期から２年生後期まで担当できるように，履修科目の系統性を損なわない範囲で調整した。残念ながら，一部の教員については，選択科目の担当にとどまってしまったが，全教員が本学に意欲をもって入学した学生を２年間トータルに指導できる体勢の構築は大きな意味を有する。

３．今後の課題

(1) 教員間での連絡・調整の現実的必要性

現在は，本プロジェクトの最大の目的であるカリキュラムの構造化の実現に向けての努力をしているところである。これを実現するためには，冒頭にも記したとおり，全教員の授業内容の点検を行うとともに，保育者養成という共通の目標に照らして授業内容を精選・調整することが求められる。

この作業は非常に大きな意義を有する。本学幼児教育学科において開設されているシラバスをみると，それぞれに担当教員は異なっているが，シラバスを見る限りにおいて，共通して扱う内容・項目が存在している。しかし，雑談に類する場合を除けば，複数の教員が協議して，それぞれの授業における指導内容や指導方法等を調整したことはない。もしもこのような場合において，三者三様の授業がなされ，指導の内容が万が一にも食い違うことがあれば，それは学生の不信を招く原因になりかねない。また，教員に対する不信だけにとどまらず，本学全体に対する教育不信に陥る危険性も十分にはらんでいる。共通の項目を扱う教員間での調整が求められる所以である。

また，表５をご覧いただきたい。これは，本学幼児教育学科において開設されている科目について，数年間のシラバスを調べた結果である。この表からわかることは，小学校教員養成と幼稚園教員養成を目指した児童教育学科から，幼稚園教員養成と保育士養成を目指した幼児教育学科への平成10年度の改組転換において，指導内容が当然に変わるべきであったにもかかわらず，それがなされていないと言うことである。シラバスが変更されたのは，授業担当教員が交代した場合，あるいは，担当教員が授業に使用するテキストを変更した場合であった。

これは，正直に記載することがためらわれる内容であるが，本学幼児教育学科がそ

表５

○シラバス改訂の軌跡

科　目	97－98	98－99	99－00	00－01
a	×	×	△	×
b	－	×	○	×
c	○	○	△	○
d	×	×	○	×
e	×	×	×	×
g	×	×	○	×
h	×	○	○	×
I	？？？	×	×	○
j	△	△	△	×
k	×	×	○	×
l	－	×	×	×
m	－	×	○	×
n	－	×	○	×
o	－	○	×	×
p	－	△	△	×
q	？？？	×	×	×
r	－	？？？	○	○
s	×	×	○	△
t	×	×	×	×

○　それなりの改訂がなされたもの
△　小変更にとどまったもの
×　改訂のないもの
－　児教２年生むけの科目
？？？　内容に大いに疑問を感じるもの

の教育責任を果たすためには改善されなければならない重要なポイントである。そこで，カリキュラムの構造化の必要性がより現実のものとなる。

(2) 本学におけるカリキュラムの構造化試案

カリキュラムの構造化の着想は，鳥取大学教育学部においてなされている実践に寄るところが大きい。理念や実践の方法については，鳥取大学教育学部を参考にしていただくとして，本学幼児教育学科では，カリキュラムの構造化において，構造化の段階を２つに設定することを考えている。

１つは，カリキュラム全体に全教員が連携・協力体制を構築することによって，カリキュラムの構造化を図るものである。図１～図３は，そのイメージである。

図１は，実習を中心とした構造化のイメージである。本学は，その創設以来，建学の精神にもあるとおり，理論と実践の接点の開拓を目指してきた。それ故に，他の養成校に比べて，観察実習を始め実習にかなりの時間と労力を費やしている。実際には，１年生の後期から２年生の５月末に本実習が開始されるまで，毎週火曜日午前中の時間をすべて使い，高松幼稚園と高松東幼稚園で学生たちは子どもたちと実際にふれあいながら子どもに対する理解を深めていく。また，本実習そのものは，保育士養成カリキュラムの改訂によって保育実習Ⅱ（ないしはⅢ）の履修が義務づけられたけれど

も，本学においては，それ以前から保育実習Ⅱの履修を学生に求めてきた。また，火曜日には午後から「子ども研究」「保育実習事前事後指導」と実習に関わる科目が続く。この点に，本学の建学の精神が生き続けているのである。

ところで，実習以外の種々の科目も，当然の事ながら保育者養成のための科目である。そこで，「養成課程すべてが，保育者になるための事前指導とも考えられる」という趣旨の，ある教員（Ｔ教授）の学科会議における発言にヒントを得て，すべての教員が，各々の担当科目の学問的水準を維持しながらも，純粋に学問性を追求した授業展開に偏るのではなく，保育者養成という目的を常に考慮しながらシラバスを構築し，授業内容と方法を検討することを申し合わせた。また，実習担当教員の側からは，それぞれの授業科目で教授された内容を補充・深化・統合しつつ，不足する指導内容については，遠慮なく当該教員に指導の是正を求めることに理解を求めたのである。

また，本学は，保育者養成が単なる即席養成に陥ることなく，卒業後において保育者として生涯的に資質を自ら高めていくことのできる自己教育力の育成を目指した指導を行っている。それが，１年前期に開講される「保育学研究法」，１年次に通年の授業科目として設定されている「総合演習」，そして，２年次に通年にわたって開設され，最後に２年間の学習の成果として論文をまとめる「卒業研究」である。総合演習と卒業研究は，各研究室単位に少人数で本学幼児教育学科の専任教員によってきめ細かな研究指導が行われる。よって，図２に示すように，保育学研究法・総合演習・卒業研究と研究する力の育成を通して，自ら成長する素養が身につけられることを意図している。

２つ目の段階は，個々の教員レベルでの構造化である。本稿の主たる筆者が，本学幼児教育学科で２年間に担当する授業科目の流れは，図３に示すとおりである。これらの科目には，一部に共通する内容が含まれている。そこで，例えば「保育者としての態度形成」を図る場合に，本学幼児教育学科の教員の一人として学生たちと心の通い合う日常的な関わりを大切にしながら，保育学研究法等で「研修－自己を高めることの大切さやおもしろさの体験」を，教育学原論において「基礎的教師論」を，保育原理ＩＢにおいて「代わりゆく子育て環境の中で求められる保育者の在り方」を，教育制度論において「法規定や幼稚園教育要領・保育所保育指針に求められる保育者の在り方」を，そして最後に教師論によって，実習による体験を振り返りつつ保育者として在り方を総合的に学ぶ機会として学生に提供することが考えられるのである。

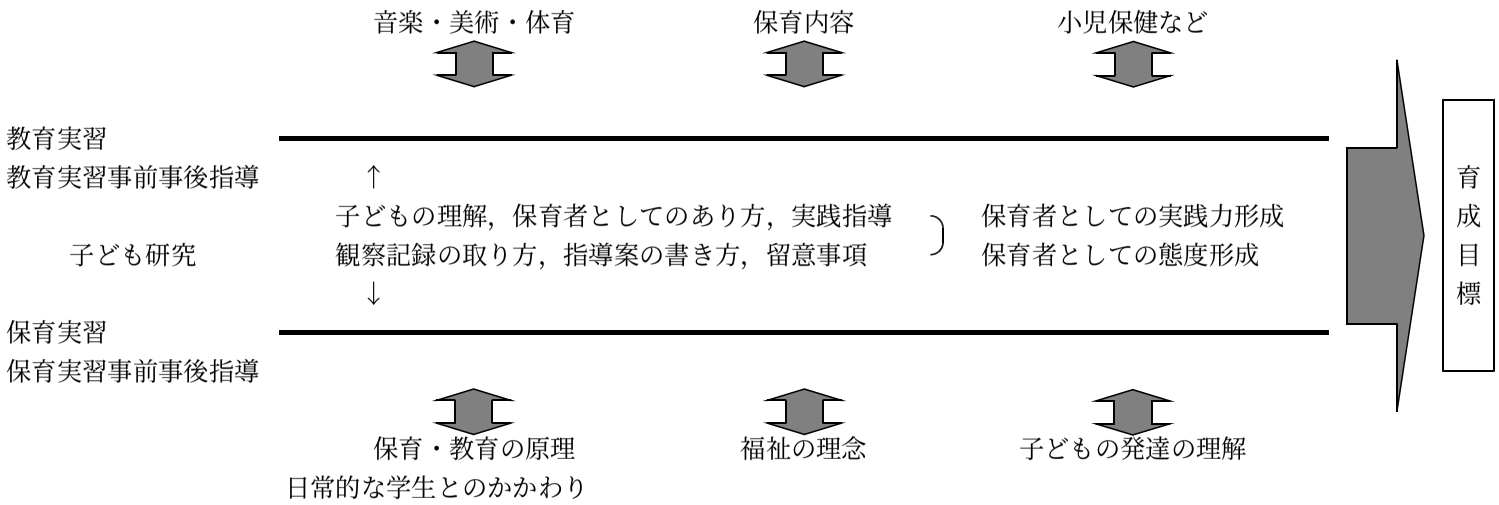
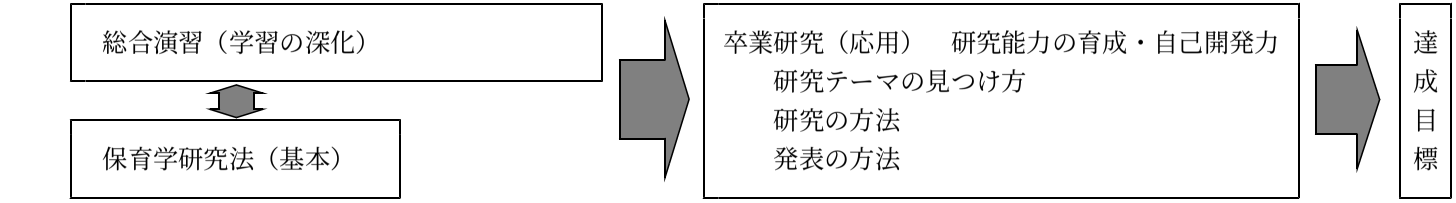


図１　連携のイメージ１　実習を中心とした実践力の育成



レポートの形式，レジュメの形式，発表の方法，研究室内での連帯感，共磨き

図２　連携のイメージ２　　研究面を中心とした学習の積み重ね

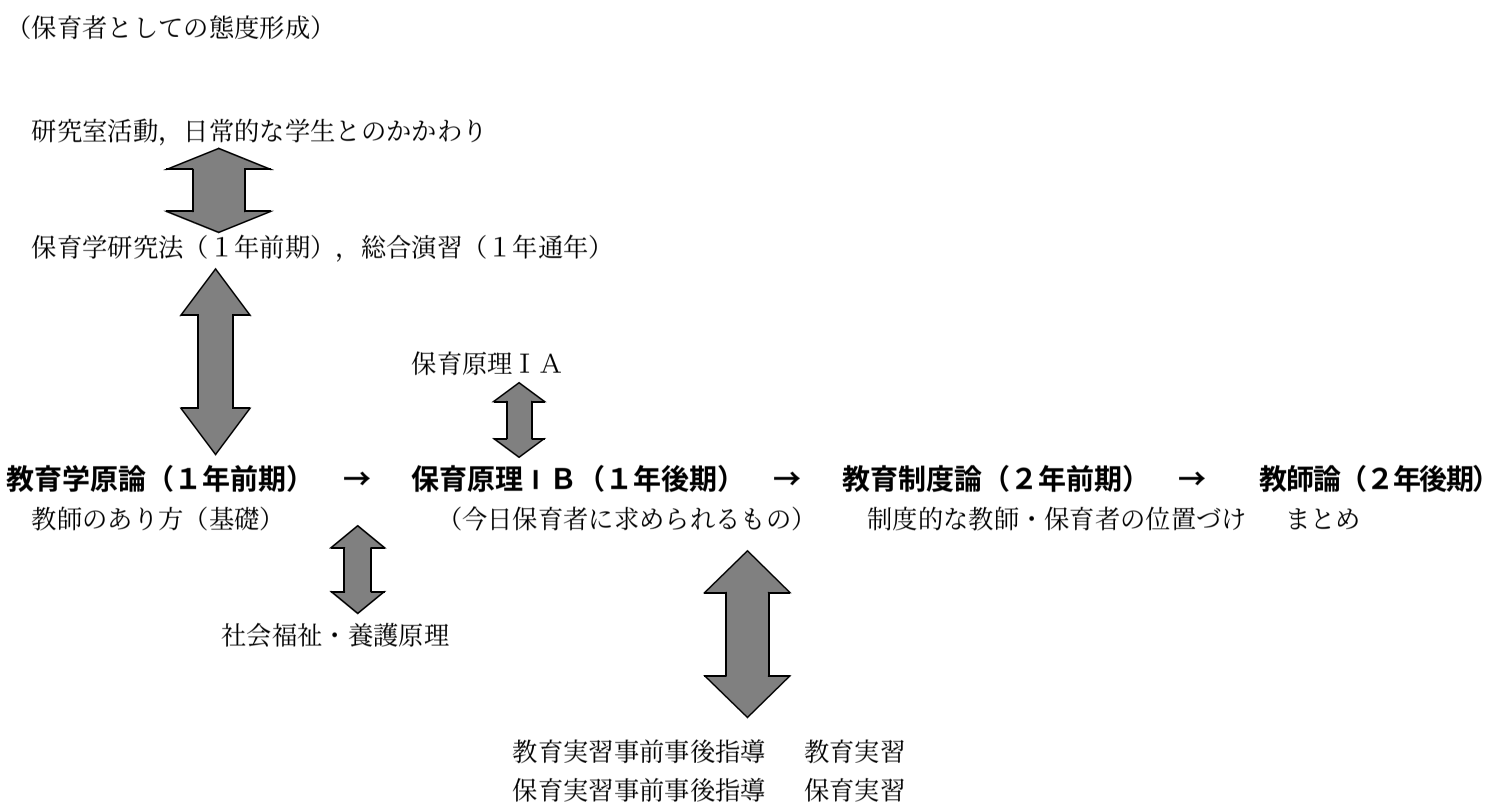


図３　連携のイメージ３　教員個人の指導の系統性

まとめにかえて

以上，概略ではあるが，平成12年度と平成13年度において，本学幼児教育学科がその社会的責任を果たすために行ってきた努力の一端を記した。本事業は，そのまとめとして，年度末に，印刷物としてその成果を形にすることが義務づけられている。

事業を進めて行くに当たっては，いろいろな意見や見解の相違があって難しい問題を抱えている。しかし，本学幼児教育学科は，平成15年度から保育学科として新たに出発することが決定している。これにあわせて，入学定員は，30名増加して，現在の50名から80名となる。これは，大学冬の時代にもかかわらず，入学に際する競争倍率が高いこと，本学幼児教育学科への求人が絶えず，本学へのより多くの資質の高い保育者養成のニーズが存在することを背景としている。

本学幼児教育学科は，保育学科としてその社会的責任を果たすためにも，今後ますますのご指導・ご鞭撻を広く求める次第である。

高 松 大 学 紀 要

第　39　号

平成15年２月25日　印刷
平成15年２月28日　発行

編集発行　高　　松　　大　　学
高　松　短　期　大　学
〒761-0194　高松市春日町960番地
TEL（087）841－3255
FAX（087）841－3064